藤浪剛一が日本最初の放射線科教授になるまで

大場　覚

名古屋市立大学名誉教授

【1】生い立ちとウィーン出立まで

藤浪剛一（図1）は尾張藩医であった藤浪万得の四男として、1880年（明治13年）6月7日、名古屋市久屋町159番地（現在、名古屋市中区久屋町5丁目9番地）で生まれ、幼小時は「かたかず」と呼ばれていた[1]。後年、藤浪剛一がウィーン大学の放射線科へ留学した際に8編のドイツ語の論文を発表しているが、いずれも、著者としてKoichi Fujinamiと本人が書いているので、剛一は「こういち」と呼ぶのが正しいと考えられる。多磨霊園にも藤浪剛一の墓があるが、インターネットで調べると、コンサイス日本人名事典からの引用とあり、「ふじなみ ごういち」と誤記されているが、「こういち」が正しい。

藤浪万得には五男二女がいて、長男の鑑（あきら）（1871～1934年）は京都大学の初代の病理学教授で、日本住血吸虫病の研究で、桂田富士郎（岡山県の最初の病理学教授）とともに日本学士院賞を受賞している。五子の由之は文学士、次女は医学博士・森島庫太に嫁ぎ、他は早く没したという。長兄の鑑が1900年（明治33年）にドイツ留学を終えて帰国しているので、剛一もいずれは自分もドイツへ留学するという夢を抱いていたのであろう。愛知県第一中学校を卒業後、上京して、獨逸学協会学校に入り、ドイツ語や、ドイツ文化などを学んでいる。当時、日本の青年の留学先はドイツが多く、留学前にドイツ語を学ぶために獨逸学協会学校に入学する人が多かった。剛一は1901年（明治34年）獨逸学協会学校を卒業後、1902年（明治35年）岡山医学専門学校に入学し、1906年（明治39年）卒業した。その後、同校の病理学教室に入り、翌1907年（明治40年）に上京して、兄の友人であった東京帝国大学医科大学の土肥慶蔵教授に付いて皮膚科学を学んだ。次いで1年後の1908年（明治41年）、北里柴三郎が所長をしていた伝染病研究所に移り、助手に採用された。ここで、北里柴三郎と出会ったことが、後年、慶應義塾大学に医学部が創設されたときに、医学部長となった北里柴三郎に藤浪剛一が理学診療科教授として招聘されるきっかけとなったと考えられる[2]。この伝染病研究所からウィーン大学へ留学するため1909年（明治42年）3月に出発した。ウラジオストックからシベリア鉄道に乗り継ぎ、ウィーンに入った[1]。この時、藤浪剛一は数え年30歳であった（表1）[3]。

【2】ウィーン大学へ留学するまでの日本のX線に関する状況

1895年、Wilhelm Conrad Röntgenによって発見されたX線の論文別冊と数枚のX線写真は、1896年正月にRöntgenからベルリン大学物理学教授のEmil Warbrugに送付された。ベルリンでは1896年1月4日、ベルリン物理学会創立50周年祭が行われていたが、RöntgenからWarbrugに送付されたX線発見の論文別冊とRöntgen夫人の手を含む数枚のX線写真のプリントが、ベルリン大学物理学研究所で開かれていた物理学器械展覧会の会場の片隅に展示された。たまたま、ベルリンへ留学していた長岡半太郎（図2）がそれをみて、直ちにこのX線発見を日本へ知らせた[4]。恐らくかつての上司であった東京帝国大学理科大学長の山川健次郎宛であったと推測される。当地のベルリンでは、このX線発見のニュースを知った神経科医のMoritz Jastrowitzが、1月6日開催のベルリン内科学会で、その発見を紹介し、1月13日のベルリン臨床週報にその記事が掲載された。日本でのX線発見の最初の報道は1896年（明治29年）2月29日の東京醫事新誌に記載された「不透明体を通過する新光線の発見」であったが、この記事は前述のJastrowitzの1月13日のベルリン臨床週報の翻訳紹介記事であった[5]。

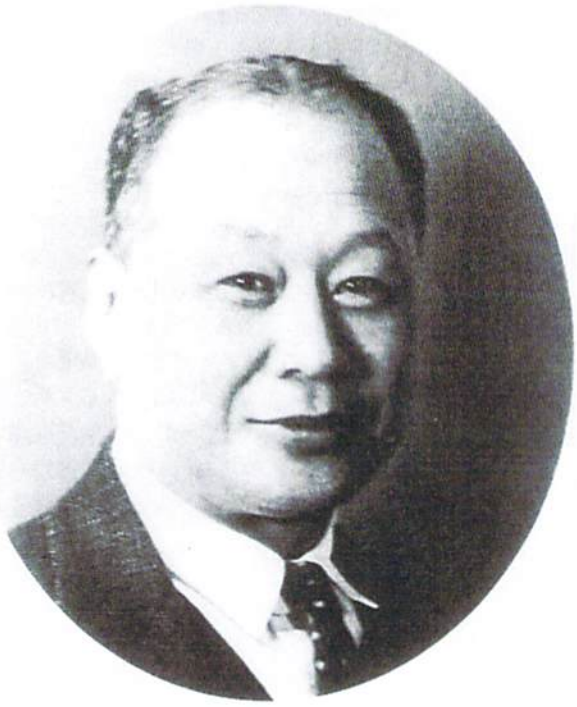


図1　藤浪剛一(1880～1942)[1]
日本で最初の放射線医学教授.

表1　藤浪剛一の略歴

- 1880年(明治13年)6月7日，名古屋市で，尾張藩医藤浪万得の四男として出生，長男の鑑は病理学者
- 1906年(明治39年)岡山医学専門学校卒業，病理学教室へ入る
- 1907年(明治40年)東京帝国大学医科大学皮膚科の土肥慶蔵教授に師事
- 1908年(明治41年)伝染病研究所の助手
- 1909年(明治42年)ウィーン大学放射線科へ留学し，Holzknecht, Kienböck, Langに師事し，レントゲン診断学，レントゲン治療学を学ぶ
- 1912年(明治45年)3月，帰国
- 1912年(明治45年)5月，順天堂医院にレントゲン科を創設して，着任
- 1916年(大正5年)済世会病院本院にレントゲン科を創設して，兼任
- 1920年(大正9年)7月，慶應義塾大学医学部理学的診療科教授に就任
- 1942年(昭和17年)11月29日，心筋梗塞で逝去，享年62歳

日本国内でもX線発見が報道されるや、山川健次郎、鶴田賢次の帝国大学理科大学グループ、水野敏之丞、山口鋭之助の第一高等学校グループ、村岡範為馳と二代目島津源蔵グループなどの物理学者を中心にX線による撮影が追試された。日本におけるX線発見の受け入れ方については鈴木宗治のX線発見100周年記念式典記念講演記録に詳しく述べられているので、その論文を参照されたい[4]。

日本でのX線の医学的応用は撮影装置が輸入に依存していたため、諸外国よりかなり遅れた。日本で最初にX線撮影を臨床的に応用したのは、帝国医科大学外科の外国人教授Julius Scribaであった。Scribaは1898年ドイツへ一時帰国した際にシーメンス社製X線発生装置を持ち帰り、同年3月にX線撮影をしているが、この装置は電源の問題で臨床に用いられることはなかったといわれている。また、Scribaは丸茂文良、芳賀栄次郎にX線撮影法を手ほどきした。丸茂文良は1896年5月31日に済生学舎(明治時代にあった私立医学専門学校)で「レントゲン氏の所謂X光線のデモンストラチオン」と題して講演と公開実験をしている。丸茂文良は外科医で、X線の医学的重要性は十分認識しており、X線の細菌への影響についても実験していた。ScribaからX線撮影の手ほどきを受けたもうひとりの外科医、芳賀栄次郎は日本の放射線医学の発展に重要な役割を果たしてはいるが、彼は軍医であったので、軍事医学にX線撮影が役に立つことを主張していた。一般臨床医学に声高にX線撮影が役に立つという啓蒙運動をしていた形跡は、藤浪剛一のウィーン



図2　長岡半太郎(1865～1950)[3]
X線発見のニュースを日本へ伝えた.



図3　芳賀栄次郎(1864～1953)

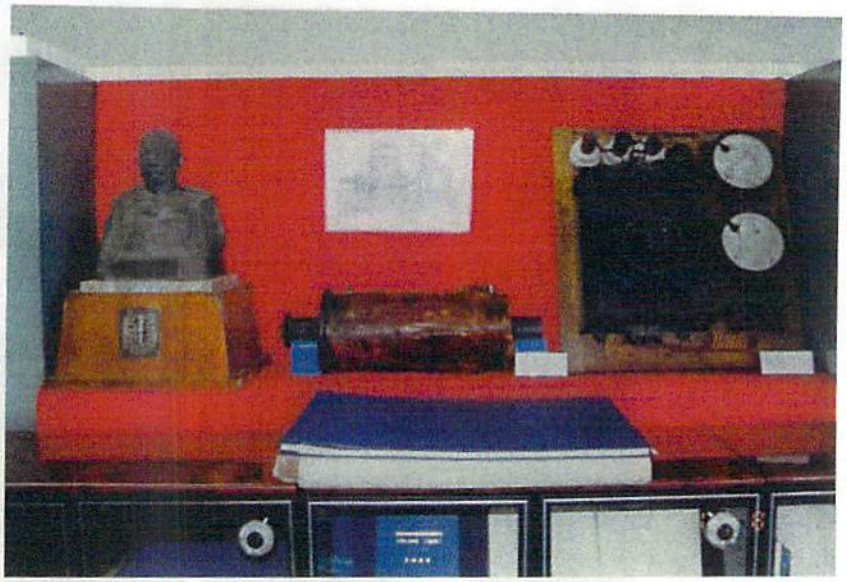


図4　陸上自衛隊衛生学校の「彰古館」に保存されている芳賀栄次郎が日本へ持ち帰ったX線発生装置
上段中央に30cm閃光長感応コイル，その右が操作板，下段中央に当時撮影されたX線写真のアルバム．

留学以前にはなかったようである。

以上のごとく、当時、わが国でX線の臨床応用していたのは、東京帝国医科大学の外科教授のScribaとその弟子の丸茂文良、芳賀栄次郎の両名くらいである。東京にいれば両者の活躍を見聞する機会は藤浪剛一にあったかもしれないが、藤浪剛一が上京して、獨逸学協会学校に入ったのが1901年であるので、X線の発見に興味をもっていたかもしれないが、医学応用についての知識は、1901年以前は持ち合わせていなかったと考えられる。

芳賀栄次郎は、東京帝国医科大学を1887年(明治20年)に卒業し、陸軍軍医となったが、大学院に進み、外科学を選考した(図3)。芳賀栄次郎は軍医として、1896年(明治29年)、医務視察として2年間のドイツ駐在のため、ドイツに出発した。帰国したのが1898年(明治31年)11月で、帰国の際にシーメンス社製30cm閃光長感応コイル式X線発生装置を購入して持ち帰り、陸軍軍医学校に設置して、傷病兵のX線撮影を行った。その装置は現在、東京三宿にある陸上自衛隊衛生学校の「彰古館」に展示されている(図4)。芳賀栄次郎は帰国した翌月の12月20日、東京軍医学会で「レントゲン写真について」と題して講演している。翌年の1899年(明治32年)、論文「レンチェン写真について」を軍医学会雑誌100号に発表して、レントゲン写真の概況、医学的応用、ことに軍陣外科的診断および治療に必要欠くべからざることを説いている[6]。このように芳賀栄次郎は軍事医学の領域でのX線の医学的応用を広めた人物である。稲本一夫によると、日本陸軍では1899年にはX線装置3台しかなかったものが、1901年には13台になったとのことである[7]。しかし、この時代は1904年(明治37年)2月から翌1905年(明治38年)5月にかけて日露戦争があって、野戦で多くの戦傷者のX線撮影は行われたが、一般医療にはあまりX線撮影は行われていなかった。藤浪剛一はこの時代は1902年から4年間、岡山医学専門学校にいたが、X線の医学的応用の情報についてどの程度知っていたかは不明である。

兄の病理学者の藤浪鑑が1896年にドイツへ留学し、帰国したのが1900年で、ウィーン大学に放射線医学専門講座が開設されたのは藤浪鑑が帰国して4年経過した1904年のことである。弟の剛一が新しい学問分野に興味をもち、ウィーン大学放射線科へ留学するのは、さらに、4年後の1908年である。藤浪鑑はドイツ、オーストリアでX線が臨床的に応用されていたのを、1897年8月にモスクワで行われた第12回万国医学会に出席した際に知っていたかもしれないが、病理学者が新しく台頭した学問分野に興味をもつことは少なかったであろうから、兄の藤浪鑑が放射線医学を勧めたとは考え難い。また、藤浪剛

一が1908年に留学先をウィーンの放射線科に決めた当時、軍事医学の一環としてのX線医学をドイツで学んで帰国していた芳賀栄次郎は軍医(外科医)として広島へ赴任しており、藤浪剛一と直接、接触した形跡がない。これもまた、藤浪剛一が放射線医学を選ぶに際し、彼の影響を受けていたとは考え難い。

筆者は藤浪剛一が誰かに影響されて、放射線医学を選んだのではなく、欧米の放射線医学のパイオニアと同様に、X線が1895年に発見され、そのニュースが世界を席巻し、日本でも物理学者を中心にX線撮影の追試が行われたという記事などからX線というものに強い興味を持ち、新しい医学分野への応用の可能性を直感的に感知し、自らこのことにチャレンジしようと決心したと考える。

[3]留学前のウィーンでのX線発見後の状況[8)]

1895年11月8日、RöntgenはX線を発見し、その論文別冊を1896年の正月に年賀状代わりに欧米の90余名の科学者に送付した。その論文別冊がRöntgenとスイス連邦工科大学時代とストラスブルク大学時代に、August Kundt教授の助手として同僚であったウィーン大学物理学教授のFranz Exnerの手元に届いたのが1月3日か4日で、4日の晩にFranz Exnerが物理学者の集会でX線発見の事実を紹介した。そして翌日の1月5日のウィーンの日刊紙「Die Presse」の朝刊に「センセーショナルな発見」という記事でスクープされ、ドイツはもちろん、海底電線に乗って海外にあっという間にそのニュースが伝えられた。このスクープ記事内に医学的応用の恩恵についても言及されていたので、X線発見の論文を読んで、ウィーンでも、ベルリンでも手足のX線写真が1カ月も経たない間に医師会の会合で披露された。特にウィーンでは世界に先駆けて、いち早く人体のX線撮影が行われた。RöntgenからX線発見の別冊とX線写真を受け取ったFranz Exnerは、弟のウィーン大学生理学教授のSiegmund Exnerにも、X線発見の別冊とX線写真(恐らく、Röntgen夫人の手のX線写真も含まれていたであろう)をみせて、医学に応用できることを教えた。そのSiegmund Exnerは1896年1月10日の医師会の集会で「ヴュルツブルク大学物理学教授Röntgenによって新しく発見された放射線を使ってつくられる写真」と題して、1枚の手のX線写真を供覧し、Röntgenの実験結果について講義を行った。そのX線写真は、Franz Exnerの物理・化学研究所でGustav Kaiserによって撮影された左手の第5指中節骨の外傷患者のものであった(図5)。Siegmund Exnerはさらに翌週の1月17日の集会にも前腕骨折、手の銃弾損傷、重複母趾の3症例のX線写真を供覧している。このSiegmund Exnerは後年の1903年(明治36年)に順天堂医院の副院長だった佐藤達次郎の研究指導をした人物である。佐藤達次郎は藤浪剛一を順天堂医院に招聘した人である。



図5　Siegmund Exnerが1896年1月10日，ウィーンで最初に紹介したX線写真
X線撮影はGustav Kaiserが行った．左第5指の骨折がみられる．

ウィーン大学での放射線医学の状況については、筆者がすでに「X線発見間もないウィーンと日本の対応」という論文で詳しく考察したので[8)]、詳細は省くが、藤浪剛一が留学した当時のウィーン大学医学部の放射線医学教室はGuido Holzknecht(1872～1931年)とRobert Kienböck(1871～1953年)の2人が(図6)、新しい医学領域としての放射線医学の重要性を伝統のあるウィーン大学の教授会のメンバーに1年以上にわたって説得に努め、1903年1月放射線医学教授資格(講師)の許可が認められ、1904年5月、Holzknecht, Kienböck, Freundの3名が放射線医学の教官(講師)に任命されて、ウィーン大学に独立した医学部門として放射線医学講座が発足していた。そして、その存在感を世界へ発信していた時代であった。欧

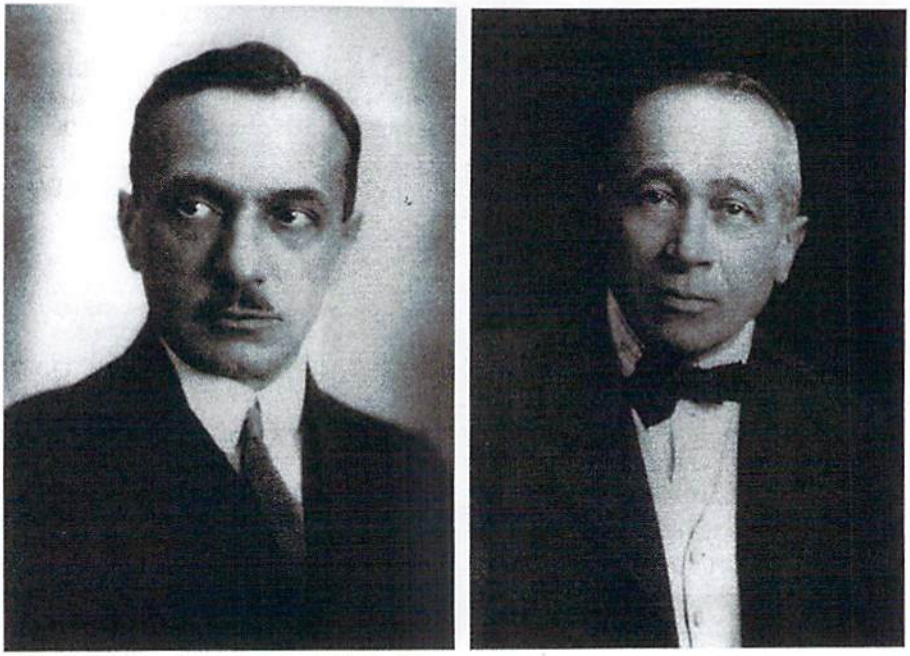


図6　ウィーン大学に放射線医学講座を開設したHolzknecht(A)とKienböck(B)　A | B

州各地やアメリカからも新しく台頭した学問を学ぼうと多くの留学生が集ってきていた。なお、Holzknechtが教授に昇格したのは1912年であった。

[4]藤浪剛一のウィーン留学時代

藤浪剛一は1909年3月にウィーンに入った。当時のウィーン大学医学部の放射線医学教室はHolzknechtとKienböckの2人が、指導的立場に立ち、欧州各地やアメリカからの留学生を教育していた。藤浪剛一はレントゲン診断学とレントゲン治療学をHolzknechtに(図7)、骨のレントゲン診断学とレントゲン治療学をKienböckに(図8)、さらにレントゲン治療学をEdward Langeに学んだ。このウィーン大学で藤浪剛一は8編の論文を書いている[9]。そのうち4編はHolzknechtの指導による胃に関する論文で、そのなかで、胃の空虚時の胃液の量をレントゲン学的に確認する方法についての論文は、1915年(大正4年)、東京帝国大学へ提出して医学博士を授与されたものである。2編はKienböckの指導による手根骨の骨化の論文と、くる病における手根骨の骨化についての論文であった。さらに皮膚科梅毒科教授のLangの指導による喉頭の狼瘡の紫外線療法の論文であった。このほかに1912年のスイス医事評論に「日本における医学」と題した医学史に関した論文を発表している。藤浪剛一のウィーン滞在中の私生活につては記録が乏しく知る由もない。1998年ウィーン医学史研究室の一員のDaniela Angetterが書いたHolzknechtの「生涯とオーストリア放射線医のパイオニアの業績」と副題のついた単行本が出版されたが、その本文内には藤浪剛一の文字はないが、藤浪剛一が写っている3枚の写真(図7〜9)が掲載されているので紹介しておく[10]。藤浪剛一の留学のあとに続いて、表2に示した人たちがこのウィーン大学放射線科へ留学し、Holzknechtに師事している。

[5]藤浪剛一を順天堂医院に招聘した佐藤達次郎

順天堂医院の第二代院長の佐藤進の養継嗣の佐藤達次郎の第一回目の欧州留学は、1897年(明治30年)5月14日に横浜を出航し、最初はベルリン大学へ行き、さらにウィーン大学で、Albert教授、Güssenbauer教授に外科学、皮膚科学を学んでいる(図10)。1897年8月、モスクワで開かれた第12回万国医学会にも出席した。前年からドイツに駐留していた芳賀栄次郎もその学会に同行しているので、芳賀栄次郎からX線の医学的応用の話は聞いていたであろう。また、佐藤達次郎はウィーン以外のベルリン、ロンドン、パリなど欧州の大学の外科学を見聞



図7　ウィーン総合病院で，HolzknechtによるX線治療の指導を受けている人たち[10]
右から3人目が藤浪剛一．



図8　Allgemeine Poliklinikで，Kienböckに指導を受けている人たち[10]
右から3人目が藤浪剛一，中央で座っているのがKienböck.



図9　旧ウィーン総合病院のRoentgen Laboratoriumの前で1913年撮影された写真[10]
2列目の左から5人目が藤浪剛一，中央に座っている人がHolzknecht教授

表2　Holzknechtに師事した日本人

- 藤浪剛一(1909～1912)
- 浦野多門治(1913～1914)
- 小池才一(1925～1927)
- 田宮知耻夫(1927～1928)
- 樋口助弘(1928～1929)
- 黒川利雄(1932)



図10　佐藤達次郎(1868～1959)
1902年(明治35年)に撮影された写真[11].

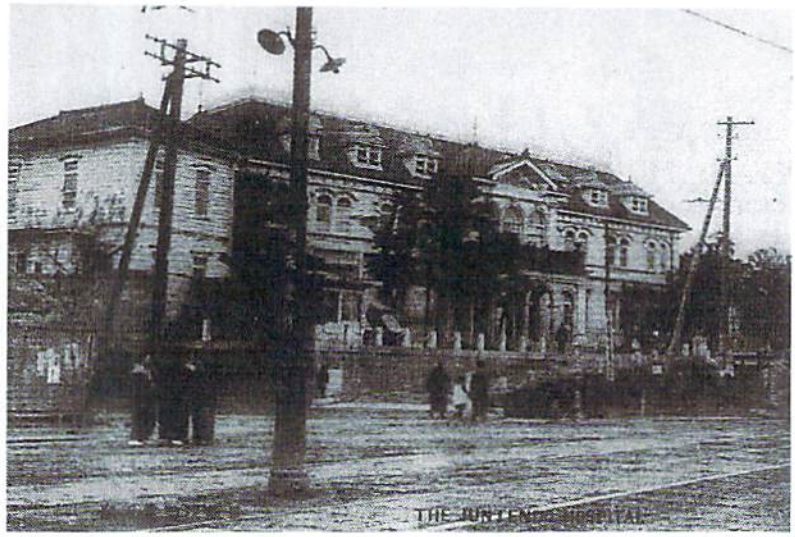


図11　1906年(明治39年)に改築された順天堂医院[7]
日本で最初にレントゲン科が創設され，藤浪剛一が初代科長を務めた。写真は大正初期の写真と考えられる.

して回って、1900年8月に帰国している。第二回目の留学は博士号取得の研究のために1903年3月に横浜港を出発し、第一回目と同様にウィーン大学に留学し、生理学教授のSiegmund Exnerの指導下で、約1年間研究を行って、翌1904年4月に帰国している。このSiegmund Exnerは前述したように、1896年1月X線の発見を知らされた兄のウィーン大学物理学教授の弟で、世界に先駆けて、ウィーン医師会の集会で臨床症例のX線写真を供覧した人物である。したがって、佐藤達次郎はX線発見当時のウィーンでのSiegmund Exnerの活躍を聞いて知っていた可能性は高い。佐藤達次郎が第二回目のウィーン大学へ留学した1903年頃には、ウィーン総合病院内にはすでに中央放射線室があってHolzknechtが主任として活躍していたし、Kienböckも1902年からウィーン総合病院の近くにあるAllgemeine Poliklinikのレントゲン科の主任として活躍していた。

1906年(明治39年)順天堂医院は新しい建物に改築され(図11)、近代化を目指していた。佐藤達次郎の養父の佐藤進は藤浪剛一の順天堂医院時代の院長であったが、日清、日露戦争においては陸軍軍医総監を兼任し、芳賀栄次郎の上司でもあった。佐藤進が立ち上げて発足させた順天堂医事研究会の1901年(明治34年)4月の総会では、芳賀栄次郎に「銃創とX光線写真」の演題で講演させているし、日露戦争での傷病者の戦地でのX線写真の効用は十分経験していた人物である。陸軍軍医総監を兼任していた佐藤進を補佐していた副院長の佐藤達次郎は、1909年(明治42年)頃から順天堂医院の実務を任されていた[11]。彼もまた芳賀栄次郎を通じてX線の医学的応用については十分理解していたと考えられ、X線を利用した臨床医学の専門家を物色していたところへ、1912年(明治45年)1月、藤浪剛一が帰国したので、早速、彼を招聘した。佐藤達次郎がいつ、どこで、どのようにして藤浪剛一と知り合ったのであろうか。もしかして藤浪剛一が留学前に、ウィーン大学に留学した経験のある佐藤達次郎を訪ねて、ウィーンの事情を聞きに行ってでもして、知り合ったのではないかと憶測しているが、確証はなく不明である。

佐藤達次郎は藤浪剛一を迎え入れるため、ドイツのライニーゲル社製直流感応コイルX線発生装置「アベックス」を購入設置し、国内最初のレントゲン科を順天堂医院に創設し、初代科長として藤浪剛一を招聘したのである。レントゲン科という今まで日本で全く未知の診療科を創設するに当たっては、藤浪剛一がウィーン大学総合病院での独立した診療科としての放射線科の思想を学ん

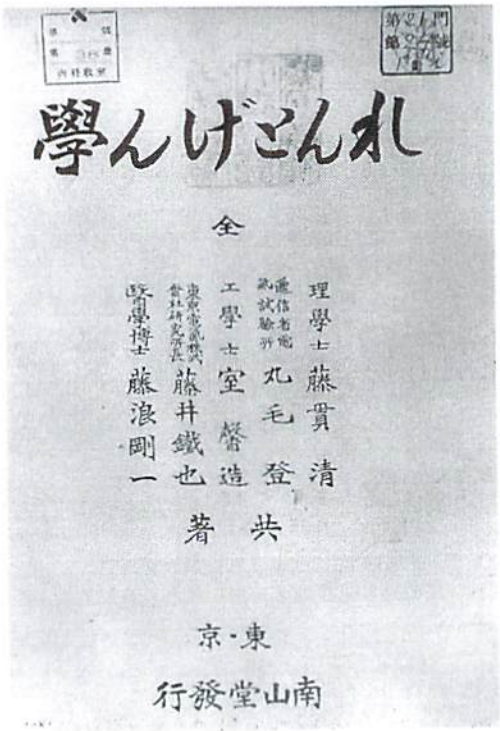


図12　1914年(大正3年)，南山堂から出版された日本最初の放射線医学の専門書

できたことから、佐藤達次郎に強く要望して実現させたのであろう。

[6]順天堂医院時代の藤浪剛一

藤浪剛一は1912年(明治45年)5月、順天堂医院レントゲン科長に着任するが、それに先立って3月から4月にかけて順天堂医院でX線講習会を行い、4月15日には、順天堂医事研究会例会で、「レントゲン療法現況概略」と題して講演も行った。講演内容は順天堂医事研究会雑誌第472号(明治45年4月30日発行)に掲載されている[7]。藤浪剛一は順天堂医院で、診断学としては骨病変(腫瘍、奇形など)、結核(頸部、肺、腎、骨)、消化器病変、泌尿器病変、皮膚病変、心臓循環器病変など、X線治療応用としては白血病、結核などを主に研究した。また、X線の防御・障害について、さらに、増感紙、バリウムなどの撮影技術についても研究発表するとともに、X線やその取り扱い方、応用についての啓蒙活動も精力的に行った。1914年(大正3年)には、日本最初の放射線医学の専門書である「れんとげん学」を南山堂から出版している(図12)。また、1918年(大正7年)には、朝香屋書店から「レントゲン写真図版」を出版した。これは小児の手根骨の骨化のX線写真アトラスである。順天堂医院にいた9年間に著書7冊、論文44編、講演7回の業績があり[7]、一方、1913年(大正2年)レントゲン研究会を設立し、X線の啓蒙活動を行った。また、鈴木元晴、小池才一、瀬木嘉一、深堀清彦などのX線専門医の育成にも尽力した。

[7]北里柴三郎と藤浪剛一との接点

話は前後するが、藤浪剛一は1912年3月、欧州から帰国し、真っ先に、ウィーンへ出発前の元上司である北里柴三郎のところへ帰朝報告に馳せ参じ、ウィーン大学では放射線医学が独立した学問分野として発展していることや、診療科などの組織や教育、診療などについて報告したであろうことは想像に難くない。また、日本の医学、医療のなかにも同様の独立した診療科や学問分野が必要で、そのために誠心誠意働く抱負を北里柴三郎に熱っぽく話していたであろう。藤浪剛一は帰国後の身の振り方、すなわち、留学の成果を日本の地に根付かせるために、まず順天堂医院にレントゲン科を創設して、そこを活動拠点として働くことになったが、北里柴三郎は、やがて自分が院長となって1915年(大正4年)12月1日に開院した済生会病院本院(現、済生会中央病院)にも藤浪剛一を呼んでレントゲン科を創らせ、併任させていた(図13)[12]。慶應義塾大学に医学部が創設されて、北里柴三郎が医学部長になった時、藤浪剛一を理学診療科の教授に招聘したのも、すでに藤浪剛一から機会あるごとに、放射線診療の実績や、放射線医学の教育の必要性を認識させられていたし、実績を積んできたことが認められてのことであろう。

[8]慶應義塾大学医学部理学診療科教授に

ウィーン大学放射線科に留学した藤浪剛一はウィーン大学内で独立した診療科がつくられ、HolzknechtとKienböckによる人材育成の実際をつぶさにみてきたので、日本でも放射線医の教育や育成は大学という場でこそ可能と考えたに違いない。北里柴三郎の招聘に喜んで応じたはずである。1920年(大正9年)7月、慶應義塾大学医学部に日本初の理学診療科講座が設置され、藤浪剛一が初代教授となった[13]。慶應義塾大学医学部の理学診療科教室での活動については、その同門会記録である



図13　北里柴三郎(1852～1931)[12]

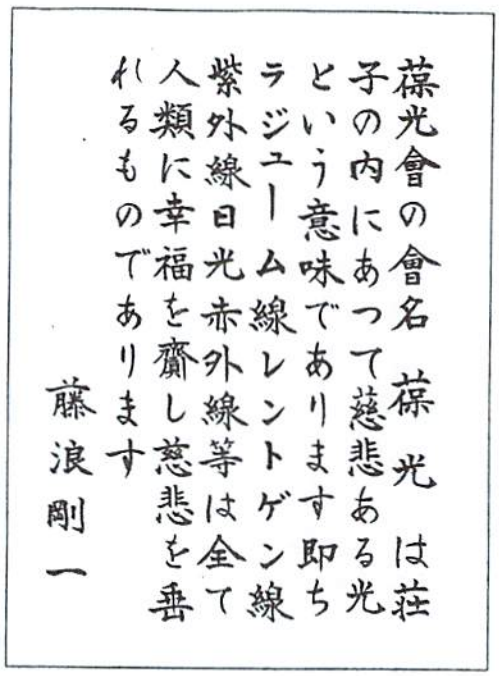


図14　藤浪剛一が書いた葆光の語源

「葆光会」に詳しいので、そちらを参照していただきたいが、藤浪剛一自身がその「葆光会」の葆光について解説しているので紹介する[13]。「葆光は荘子の内にあって慈悲ある光という意味であります。即ち、ラジューム線、レントゲン線、紫外線、日光、赤外線等は全て人類に幸福を齎し、慈悲を垂れるものであります」と。1930年(昭和5年)、慶應義塾大学医学部理学診療科教室の同門会を藤浪剛一が「葆光会」と命名し、後進のために自筆で書かれた書が残っている(図14)。自宅の玄関にも「葆光」と大きく書いた書の額が掛かっていたという[14]。藤浪剛一は日本医学放射線学会の生みの親であるが、放射線医学以外にも医学史、温泉科学など幅広く、日本医学に貢献すべく、多数の学会を立ち上げている(表3)。それらについては、各々の学会史を参照されたい。1942年(昭和17年)11月29日、心筋梗塞で逝去、享年62歳であった[14]。

表3　藤浪剛一が創設に関与した主な学会

- 日本レントゲン学会(1923年)
- 日本医史学会(1927年)
- 日本放射線医学会(1933年)
- 日本温泉気候学会(1935年)
- 日本医学放射線学会(1940年)
- 日本温泉科学会(1941年)

【9】まとめ

藤浪剛一の父、藤浪万得は当初、自分の跡を継いで開業医になることを希望して剛一に岡山医学専門学校を選ばせたのであろうが、剛一の新しい医学の分野への好学心への欲求を覆すことはできなかった。藤浪剛一がどのようにしてこの放射線医学という新しい学問分野に興味をもち、ウィーン大学を留学先に選んだのか調べてみたが、結果的にはその手掛かりは得られなかった。

藤浪剛一がウィーン大学の留学から帰国し、順天堂医院に日本で最初のレントゲン科を創設した際に、ドイツからX線撮影装置を輸入してまで、レントゲン科の創設に尽力したのが、当時の順天堂医院の副院長だった佐藤達次郎であった。そこまでして創設したレントゲン科や藤浪剛一について、後に自伝を書かれた佐藤達次郎が全く語らなかったのはなぜであろうか疑問が残る。したがって、佐藤達次郎と藤浪剛一との出会いや、レントゲン科創設の経緯については、手掛かりを得ることはできなかった。

慶應義塾大学医学部ができ、理学療法科の教授に藤浪剛一を招聘したのは北里柴三郎である。北里柴三郎は藤浪剛一がウィーン大学へ留学する時点の伝染病研究所の

上司であったし、留学から帰ってきた後、済生会病院本院にレントゲン科を創設し、藤浪剛一にその仕事を任せたのも北里柴三郎であった。藤浪剛一については直弟子の玉木正男先生がいろいろな機会に講演されて、その記録が残っているが[9, 15]、著者の調査能力が乏しいこともあって、玉木正男先生を超える新事実は少ないが、医学放射線学会以前の藤浪剛一について、再考を試みた。

（この論文は2007年4月13日、日本医学放射線学会、名誉教授の会で講演したものに加筆したものである）

【参考文献】

1）藤浪隆夫：私信
2）藤浪剛一：放射線医学の草分．岡山医学同窓会報 76，1994
3）後藤五郎：日本放射線医学発展に寄与貢献せし主たる物故者の略歴．日本医学放射線学会，1985
4）板倉聖宣，木村東作，八木江里：長岡半太郎伝．1973，朝日新聞社，東京
5）鈴木宗治：エックス線発見と19世紀末の日本における受け入れ方－X線発見100周年記念式典講演－．日本医放会誌 56：241-250，1996
6）稲本一夫：日本のレントゲン史初期における新事実 後編．日放技学誌 51：1275-1280，1995
7）茗渓の光：順天堂放射線の曙．片山仁教授退任記念誌『花みずき』17～27，1999，順天堂大学放射線医学教室
8）大場　覚：X線発見間もないウィーンと日本の対応．日獨医報 48：568-586，2003
9）玉木正男：初代教授 藤浪剛一先生を偲ぶ～特に先生の欧州留学当時について～．開講70周年記念誌追録講演集 5-18，1990，慶應義塾大学医学部放射線科学教室葆光会
10）Angetter D: Guido Holzknecht; Leben und Werk des Pioniers der österreischen Röntgenologie. 1998, Werner Eichbauer, Verlag, Wien
11）小川鼎三：生誕百年記念佐藤達次郎略伝．1968，順天堂
12）長木大三：北里柴三郎とその一門 増補版．1992，慶應義塾大学出版会，東京
13）葆光七拾年記念誌．1990，慶應義塾大学医学部放射線科学教室葆光会
14）藤浪和子編：藤浪剛一追悼録．1943
15）玉木正男：日本最初の放射線科医、藤浪剛一．健康文化 5，1993